

中上健次『岬』

——秋幸が自己を確立するまで——

佐藤綾佳

はじめに

第七十四回芥川賞受賞作である『岬』（一九七五年、「文学界」と『枯木灘』（一九七六年、「文芸」）、『地の果て 至上の時』（一九八三年、書き下ろし）の三作は、主人公が秋幸という同一人物であることから「秋幸三部作」と一括りにされている。だが、この三作における秋幸の位置は明らかに異なっている。

『岬』では秋幸が主人公とされながら、作品中に起こる古市刺殺事件などの出来事に影響を受ける人物は姉・美恵である。そして、秋幸らはこの姉の変化に巻き込まれ、姉を中心

として作品は展開していくため、主人公は一見、姉と誤解されてしまう。だが、秋幸は姉の行動に寄り添い続けることにより、潜在的な主人公としてあり続けているのである。『岬』は父の法事とそこまでの準備が描かれるメインストーリーと、そのサイドストーリーとして日々の土方仕事や刺殺事件、精神の錯乱状態に陥った姉に平温な時間が一時訪れる岬での出来事が描かれる。そして、クライマックスにおいて母系から父系へと作品世界は転調していく。このような中で、秋幸は姉や母に兄と似ていると言われ続け、自己の存在を確立することが出来ない。それゆえ、『岬』では秋幸は作品の前面に出ることが不可能であるのに対し、『枯木灘』と『地の果て 至上の時』では秋幸は既に存在を確立したため、主人公

に相応しい人物として作品の前面に描かれるのである。

『岬』では母系が主であり、『枯木灘』では母系に父系が関わってくる作品であるのに対し、『地の果て 至上の時』では前作まで一貫して、敵と見なしていた実父・浜村龍造のもとに身を寄せるため父系が主となる。このように「秋幸三部作」は、主人公である秋幸の存在確立の度合いが強まるにつれ、作品の背景も母系から父系へと移行していく。そのため、この三作は続編と捉えるのではなく連続性を持った作品群と捉え、それぞれの作品を特徴付けるテーマを一作ずつ論じていくべきである。そこで、本稿では『岬』において姉らに兄の影を重ねられる秋幸が、どのように確固たる自己を確立し、主人公の位置まで昇り詰めて行くかを作品内の象徴的な出来事を挙げ見ていく。また、本稿では作品本文に基づき美恵を「姉」と芳子を「芳子」と呼び分ける。

一、『岬』の人物関係

『岬』の人物関係は芥川賞の選評¹⁾でも述べられているようにわかりづらい。関係者系図を見てみると1と示す秋幸が暮

らす現在の家族、2と示す姉の家族、芳子の家族、光子と安雄夫婦、古市の家族と多くの家族が登場している。さらに秋幸や姉の回想によつて、母と姉と兄と芳子と父からなる家族、秋幸と母と姉と兄と芳子と暮らした家族、姉と兄のみで暮らした家族が登場する。この過去の家族は、現在姉が住んでいる2の家で暮らしていた。そして、家の形は構えてはいないが、秋幸と母と「あの男」との血の繋がりがも存在する。このように、時間を跨ぎ複数の家族が登場し、同一人物がいくつもの家族に属してしまつたため複雑さが増し、人物関係がわかりづらいとされてしまうのである。その上、彼らはいくつもの家族に属しているにも関わらず、秋幸から見た続柄で呼ばれている。その中で秋幸は一人称ではなく「彼」と呼ばれる。なぜなら、秋幸は確固たる自己を築けておらず、自身を一人称で呼ぶ力を持っていないためである。そのような中、姉の一人である芳子は姉ではなく芳子と呼ばれている。続柄で呼ばれている人物にも名前が与えられているにも関わらず、呼び方を統一しなかった理由があるはずである。

母の声で、眼をさました。蒲団の上に、母は、寝巻き姿

のまま正坐している。義父は、その横で胡坐をかいてゐる。彼と文昭は、隣の部屋で寝ていた。兄が来ているのがわかった。また、泥酔している。

「母さんと秋幸が幸せに行くのが、憎いんか」

(…中略…)

「おまえは、昔からそうやったなあ。おまえは、おれら兄妹だけ、放つたらかして、秋幸だけ連れてこの男と逃げようとしたな。ちゃあんと覚えとる。まだ芳子も美恵も、いまの秋幸ぐらゐの時じゃ。おれらは忘れてないぞお」兄はどなる。語尾がふるえる。「ぶち殺したるかあ」

彼は、悲しくはなかったが、泣いてみた。そうすれば兄の怒りがおさまるかもしれない、と思つた。隣の蒲団で寝入っているはずの文昭が、手をのばして、彼の口をふさいだ。「秋幸、おまえもここへ来い。裏切り者」兄の声がした。寝たまま文昭が、手で、外へ出るなどおさえていた。彼は、文昭の手を払つた。襖をあけた。兄は、包丁を持つていた。「そこへ坐れ」と、同時に畳に包丁をつき立てた。

(…中略…)

その時は、それですんだ。姉が、兄と一緒にの時もあつた。姉は、兄をとめていた。母は、兄よりも姉にむかつて、「おまえらはそんなことするんじゃない、わしの子と違ふ」と言つた。

この場面は、1へ兄が秋幸らを殺そうと来た場面である。この時、既に死んでいる父を除き、続柄で呼ばれている人物はこの場面に登場している。つまり、母系が1と2に引き裂かれたことよつて発生した血縁のしがらみの中にいた人物が続柄で呼ばれているのである。そのため、ここに描かれながら兄の恨みの向かう先にいない文昭は続柄で呼ばれない。すなわち、続柄で呼ぶことは、紀州に居続ける者の血縁の複雑さとしがらみを表しているのである。ゆえに、この騒動の渦中、名古屋へ奉公に出ている芳子は紀州の血のしがらみから抜け出した人物として、母系の間人であるにも関わらず続柄で呼ばれないのであろう。名前を与えておきながら、続柄で呼ぶことは紀州に居続ける者の血縁の繋がりの強さも表しているのである。芳子に古市刺殺事件を語る場面では、

二番目の、この土地に住む姉の嫁ぎ先で起こった刺殺事件のあらましを、名古屋の姉夫婦に語った。

と描かれている。姉が「この土地」に住んでいることは既知の事実のため「この土地に住む姉」と敢えて書く必要は無い。また、母が姉に「名古屋の芳子」と住む場を付けて呼ぶことは日常会話で使われる表現のため一見、意味が込められていないように受け取られる。だが、この姉らに住む場を付けて呼ぶ表現は、芳子が既に紀州から離れた存在であることを強調しているのだ。なぜなら、『岬』では血縁同様、地縁も重要視しているからである。

二、姉による父の法事の妨害と母系のしがらみ

父の法事は『岬』における重要な出来事である。この法事を母は義父と暮らす1で行おうとするが、芳子は父が暮らした2で行いたいと言い出す。しかし、法事は1で行われてしまふ。父の法事が行われる直前に姉は仏壇を壊しにかかる。父の法事に出ることなく2へ帰らさせられた姉は、表のこに

あるように、

彼（秋幸・引用者注）は、立ちあがって、玄関の硝子戸を閉めた。その彼の、畳を踏む足音に、姉は「来たあ来たあ」と言った。

と怯えるのである。姉が仏壇を壊しに掛かる直前、弦叔父を母がはねつけたことが姉を怯えさせる原因となつたのではないだろうか。以前、兄が酒に酔つて1へ来た時、母が「おまえら（兄と姉・引用者注）はそんなことするんじゃない、わしの子と違つ」とはねつけた記憶が姉の中で蘇つたのだろう。父の法事を2で行えなかつたことにより、姉や兄を捨てた母を許すことなく死んだ兄が、自分たちから父までも母は奪ってしまったと怒り、姉の元に来たと姉が思ったと考えられないだろうか。なぜなら、母が再々婚して作つた1で父の法事を行うことは、母が姉らから父を奪うことを意味するからだ。父が母に奪われることを許すことの出来ない芳子は母に反対したが、姉は意見しなかつた。名古屋に住む芳子と違い紀州で暮らし続ける姉は、1と2の均衡を保たなくてはならない

ため母と諍いを起こしたくないのである。これが紀州に暮らす者の血縁のしがみの現れである。自分たちを捨てた母を許せなかつた姉は、兄のように母に刃物を突きつけ、怒りを顕わにすることが出来なかつた。その後も、姉は1と2の均衡を保つために努めてきたはずである。だが、母系を崩壊させ兄を殺した母が、父までも姉たちから奪ってしまうと思つた姉は、これ以上1と2の均衡のために感情を抑え込むことが不可能となり、仏壇を壊し父の法事の妨害を行ったと考えられる。

三、兄に似ていると強いられる秋幸

秋幸は、「自分が兄と似ているとは、思えない。彼（秋幸…引用者注）は大きな体だった。」や「おれの顔は、あの男の顔だった」などと自覚しているが、母や姉から兄に似ていると言われるとそれを受け入れてしまう。秋幸は、母や姉に秋幸として 存₍₂₎ と認識されないと、確固たる存在となることができないのだ。だが、姉は秋幸が確固たる存在とならないと兄の影を重ねてしまうのである。最初に母や姉が秋幸と

兄に似ていると会話している場面が次である。

「まあ、秋幸も十五や十六じゃない、二十四にもなつてるんやから、ちよつとぐらい酒飲んでてもかまんけどな」
 「兄やんの死んだ齡やもん」姉は言った。姉は彼の体をみまわした。

「おうよ」と母は言った。卓袱台の前に坐り込んだ。妙に、母の体から力が抜けていくのがわかつた。姉の眼が、螢光灯の光を映していた。

「さつき、ここへ来る時、兄やんがおる、と思たんやだ。びっくりしたよ」姉は坐つた。「よう似て来て」

「おうよ」とまた母は言った。「秋幸見るたんびに、思うよ」

この直前、2から1へ姉と秋幸が向かう道中、表のAにあるように秋幸は足音が鳴らなくなる。足音はそれを鳴らす人物が存在するかを表すため、ここでは秋幸が秋幸として 存₍₂₎ ことを姉に認識されなくなり始めていることを示唆している。この時、姉は秋幸に、

「秋幸が、死んだ兄やんみたいな気したんや。秋幸も、兄やんみたいに、手、つないでよ。兄やんが生きてる時、いつつもこの道、手をつないで歩いて、母さんの家へ行ったんや。」

と姉は兄との思い出を語りながら、秋幸に兄の影を被せ、兄と同じ行動を取るよう望んでいる。この姉の発言も先に挙げた母と姉の会話も秋幸が兄に似ていると言っている。母と姉が秋幸を兄と結び付けようとする真意は、秋幸と「あの男」を切り離すためである。それが分かる場面を見ていく。まず姉から見てみたい。

「おつきい体じゃね、雲突くみたいな大男じゃね。あの男にそっくりになつて来たね」

「叔父さん、秋幸はわたしの弟やで」

「叔父も安心じゃ。美恵にこんな雲突くような弟があるから」

秋幸と血縁のない弦叔父は秋幸を客観的に見ることが出来、

「あの男」と似ていると言っている。だが、姉は「秋幸はわたしの弟やで」と応えることによって、2から母を奪う原因を作った「あの男」に秋幸が似るはずがないと主張する。この言葉の真意は、秋幸の血の繋がりを「あの男」から切り離し、兄や姉という母系のみと血の繋がりがあるとしているのだらう。だが、この母系を壊したくない姉の発言は秋幸を不安にさせる。弦叔父が来る直前、姉は秋幸にすしを2で食べるよう言うてから、1で母と共に食べるように言い改めている。姉は2ですしを秋幸に食べさせることで、母から秋幸を奪ったと思われなくなつたのであろう。つまり、弦叔父からは父系の人間とされ、姉には2を裏切つた1の人間とされてから2へと入れられてしまつた。そのため、秋幸は自身がいるべき場がどこであるか不安になり帰り道、表のBにあるように、「自分の地下足袋の足音を確かめながら」歩いたのである。次に、母が秋幸と「あの男」を切り離そうとしている箇所を見る。

「あれ（あの男…引用者注）の噂きくたびに、おまえの体半分割つて、血も半分、出したりたいと思うよ」

このように、母は秋幸から父系の血を抜き、母系の血のみが流れる人間にしようとしていることがわかる。姉が秋幸と兄を重ね始めた時の会話の最中、母は「おうよ」と姉に同調してはいるが、母は姉のように秋幸と兄を重ねてはいない。母は秋幸と二人でいる時、「おまえの顔みたらすくわかる。酒もバクチもやってみたい」と言う。「酒」は酒を飲んで死んだ兄と「バクチ」はバクチで捕まった「あの男」を示している。その彼らと同じ血が流れていると言っているため母は秋幸を一人の人格として捉えているのである。秋幸と「あの男」に対する姉と母の認識は違えども、秋幸が「あの男」と似ていることを否定する二人の想いは同じである。先に挙げた母と姉の会話での母の「おうよ」の意味について渡部直己は、

肯定であると同時に「母や姉の言うように、自分が兄と似ているとは思えない」人物にたいする一種の命令形としてきわだとうとする点に留意すればよい。すなわち、可変的なものと真近さとの紐帯は、厳密にまず、「女」たちの側から主人公に差しむけられようとする³⁾

と、「おうよ」は肯定であると同時に、兄と似ているとは思えない秋幸に対して、兄と似ているのだと思わせる命令形であると論じている。だが、「兄やんの死んだ齡やもん」という姉の言葉を聞いた「母の体から力が抜けていく」様子も含め、母は先に述べたように秋幸と兄を別人格として認識出来ている。また、母は真つ向から秋幸に「あの男」の血を出したいと言つことが可能であるため、敢えて兄に似ていると秋幸に言う必要はないのである。そのため、「おうよ」とは母自ら秋幸と兄が似ていると思わせる命令形でもあったのだ。

なぜなら、母には姉を捨て兄を自殺に追い込んだ負い目があるため、自殺した兄に捕らわれ始め、秋幸に兄の影を重ね始める姉に対し、罪の意識から同調せざるを得なかったのである。このように、母と姉の認識は違えども二人の秋幸に伝えたい本意は同じである。それは、母系の間人であるのだから父系へ行くなという秋幸に対する想いである。そのため、秋幸が兄に似ていると繰り返し姉らは秋幸に言うのである。この母や姉の言葉は秋幸を母系に縛り付ける呪言と言えよう。

秋幸は、自身の容姿が「あの男」と似ており兄とは似ても似つかないと自覚しているにも関わらず、兄に似ていると繰

り返し言う母や姉に反論出来ないのである。その性格が秋幸の姿勢からも伝わってくる。酒盛りの場で「大きな体をまるめ」坐っている様子は、周囲に対して遠慮していると捉えられないだろうか。母が再々婚する際、父親を異にする秋幸のみ連れて行ったため、秋幸が存在しなければ母が姉と兄を連れていった可能性は否定出来ない。また、「母ひとり子ひとり、父ひとり子ひとり」が成り立つため母が義父と再々婚したならば、秋幸が存在しなければ再々婚しなかつた可能性も出て来る。秋幸は、自身の存在によつて母系の均衡を崩したと罪の意識を背負っているのではないだろうか。そのため、秋幸は忠実な息子や弟であろうと努めていると考えられる。そこで、秋幸は自らを押しさえ込み母や姉の自身が兄に似ているという言葉を受け入れてしまふのである。このような秋幸の性格を利用して、母も姉も秋幸が「あの男」の側へ行かないよう、繰り返し兄に似ていると秋幸の心理にすり込ませることで秋幸を母系に縛り付けているのだ。

四、「岬」におけるにおい

『岬』には「冷えた土」や「草花」、「豚の尿管」、「鉄や土埃」、「化粧」、「わきが」など様々なにおいが描かれている。そして、秋幸はこれらのおいを敏感に感じ取っている。だが、においに敏感な秋幸が唯一感じていないにおいがある。それは、表のIにある「卵焼きのにおい」である。岬へ行く前日、芳子と姉が「卵焼き」について語る場面では、

「お弁当に、卵焼き入れてな」と姉は言う。彼にむかつて、「おいしいよお、砂糖入れて、おしょうゆ入れて、味つけて焼くん」と言う。

「母さんのおいは卵焼きのにおいか」芳子が言う。わらう。「昔から貧乏して、卵焼きが、うちの一癖のおかずやったもんねえ。兄やんも美恵も、夜のおかずは卵焼きときくと、わあわあ言うって」

「貧乏はいややな」母は言った。

「貧乏でも、かまつかしてえ」芳子は言う。「なあ、美

「恵ちゃん、貧乏でもかまんなあ」

この会話は単なる思い出話ではなく、姉らと母の過去に対する認識の違いを露見させる効果を持っている。貧乏の頃の工ピソードは2での出来事のため、姉たちにとっては母に捨てられる前の幸せな時代の思い出である。だが、2から抜け1を生活基盤とした母にとっては、貧乏だった時代は美談ではないはずだ。この過去を捨てるか捨てないかは、父の法事を1で行うか2で行うかという意見の違いにも繋がるのである。つまり、母の「貧乏はいややな」という言葉には過去を捨てたという意味が込められているのではないだろうか。さらに、最初に「母さんにおいては卵焼きのにおい」という姉の言葉に「あほらし」と笑う秋幸は、母と共に1に入ったため貧乏の頃に特別な想いを抱く必要はないのである。そのため、母と共に姉らを裏切った秋幸に芳子は貧乏でも構わないという同調を求めなかったのである。

「卵焼きのにおい」は1と2との確執を表面化する意味合いを持っていた。だがこれ以上に、においては重要な意味を担っていると考えられる。安雄による古市刺殺事件後に秋幸がにお

を感じた場面を見てみたい。まず、表のGの古市の葬儀の翌日の場面である。

死んだものに、この朝がないというのが不思議だった。干物を焼いたにおいがしていた。兄に、あの時、刺されて死んでいたら、自分もこの朝を見ることも、感じることもない。

兄に殺されなかったため、「干物を焼いたにおい」を秋幸は感じる事が可能なのだ。この意味合いを強める箇所として、表のHの秋幸が自身のおいを一度だけ感じ取る場面を見る。

彼は、兄が包丁を持ってやって来た時のことを思い出した。兄は殺せなかった。

刃物で、刺し傷つけることすら出来なかった。湯呑みの酒を彼は飲み干した。胃が熱く痺れ、腸を通って、陰囊のつけ根あたりに伝わる。下着から汗がにおった。

ここでも秋幸は兄が自らを殺すことが出来なかった時を思い

出している。そして、この時、秋幸は初めて自身のおいを
感じ取るのである。つまり、「この二箇所から兄に殺されなかつ
たことで、おいを感じている」と読み取れるため、おいは
「岬」において 生 の証なのである。だが、秋幸は下着に
染みこんだ汗のおいしか持つていないため秋幸の 生 の
力は微弱である。そのため秋幸は、物体として 在る が、
一人の人格として 存る と認識されないのだろう。秋幸が
存る ことが出来れば、確固たる存在となることが出来、
姉らから兄と似ているという呪言を言われなくなるのである。
だが、母系に在る限り秋幸は呪言により母系に縛り付けられ、
秋幸として 存る ことを認められず、息苦しさを感じざる
を得ない。

微弱なおいしか持つていない秋幸に対し、安雄は表のD
にあるように吐き気を憶えさせるほどの「わきが」のおい
を持つている。安雄は関係者系図を見るとわかるように、作
品の主要人物でありながら血縁のしがらみの外側に位置し、
さらに、秋幸が禁じられている性交の経験者である。安雄は
これまで秋幸の周囲にいた男である兄や義父のように、秋幸
を殺そうとしたり母系を壊す原因を作ったりしないため、秋

幸に危害を加える危険のない男である。そのため、安雄は秋
幸にとって魅力的であり目指したい人物だったに違いない。
そこで、秋幸は安雄のおいにこだわるのである。この安雄
のおいは表のDにあるように仕事中に感じるの勿論のこ
と、表のEにあるように妻の光子が安雄と話している時にも
おいを感じている。また、安雄がそばにいないとも表のF
にある安雄が古市を刺した際、安雄の「わきが」のおいを
想い出している。ここで「わきが」のおいを一場面で感じ
ているのではないことに注目しなくてはならない。この三場
面からそれぞれ違う「わきが」の意味を読み取れる。仕事中
からは 生、光子との会話の最中は 性、古市殺害場面で
は 暴力性 を示している。性 も 暴力性 も 生 が
あるからこそ存在するのである。性 は母により禁じられ
ており、暴力性 は兄が秋幸と母を殺そうとしたが殺せな
かった出来事に繋がる。つまり、性交は母に対する精神的暴
力となるため、性交を行うことが出来たら「わきが」のお
いという 生 の証を秋幸は獲得出来るのではないだろうか。
「わきが」は吐き気を憶えさせるためマイナスイメージを持つ
てはいるが、秋幸が持ち合わせない要素からなる「わきが」

のにおいは強力な 生 の証でもあるというアンビバレンツ
 なのにおいであるのだ。

五、近親相姦と秋幸の自己の確立

秋幸はクライマックスにおいて近親相姦を行ったことによつて三つの禁忌を破った。

秋幸は母に「女に、現を抜かしたらあかんわい」と言われているように、性的関係を持つことを禁じられている。また、

「月給もろたら、今度こそ、ええとこ行こうよ」文昭は
 言い彼の裸の体をみまわした。彼は母の顔を見た。

とあるように秋幸は母の顔色を窺い、母に対する遠慮から性的関係を持つことを抑制しているのである。そのような秋幸自身も、女を「知りたくなかった。余計なもの、やつかいなものに自分を関わらせ、汚したくなかった」とあるように性的関係を持つこと嫌っている。その理由は、女を知ると「とめどなくのめり込み、どろどろになり、女とみれば見境なし

に手をつけたあの男と同じになつてしまひそんな自分に不安」を抱いたからであろう。

姉が父の法事を妨害してから、母系の血のしがらみに葛藤と「息苦しさ」を憶えた秋幸は、自己の存在を確立するため、異母妹と近親相姦を行う。近親相姦の当初の思惑は、

酷いことをしてかして、あいつらに報復してやる。いや、
 彼が、その身に、酷いことを被りたかった。

あの男そのものを凌辱しようとしている。いや、母も姉
 たちも兄も、すべて、自分の血につながるものを凌辱し
 ようとしている。おれは、すべてを凌辱してやる。

と描かれているように、近親相姦は自分の血に繋がる者への報復と凌辱であり、自己の確立ではなかった。先行論においても、近親相姦は、わずらわしい血縁を背負わせた者への反発と復讐と述べられてきた。⁴⁾確かに、息苦しくさせる血縁の中に秋幸を置いた母や姉たちへの反発心はあつたと考えられる。だが、血の繋がる者への凌辱のためだけに近親相姦は行

われたのであるうか。川合智は二度行われた性交の間の会話⁵に着目し、次のように論じている。

女は「しょうもない」と言下に言う。この「妹」の言葉を聴いて、秋幸が「うなずいた」ことを読み落としてはならない。秋幸は「死」から遠ざけられ、「若い身空」で死んだ、「兄」や「姉」たちの「父」は否定される。「母」や「姉」に比べ、「妹」の言葉の清々しさは圧倒的だ。そして、これまで「母の言い分」も、「兄の文脈」も「あの男の文脈」も「拒否」し続けてきた「秋幸」が「うなずいた」のだ。ここで「生きる」という方向に「秋幸」は向いたのではないか。⁶

ここに論じられているように、「生きる」方向へ向かうための会話と捉えることは正しい。なぜなら、表の「」にある異母妹の「くさいことあらへんな、青いような、石鹸のようなおいするな」という言葉によって「生」の証であるにおいを秋幸が確認したからである。だが、異母妹との会話から「生きる」方向へ向いたのではなく、近親相姦を行う以前から、

秋幸は「生」を考えていたのではないだろうか。この近親相姦に込められた重要な意味を読み取らなくてはならない。性交を行うことは秋幸が母から禁じられ、自らも抑制していた禁忌を破ることを意味する。そして、秋幸は「あの男」を「父とは呼びたくない」と「あの男」を父と認めないという禁忌を科していたが、「この女は妹だ、確かにそうだと思つた」と確信したことにより、この禁忌を破つたのである。また、「あの男」を父と認めたことにより性交は近親相姦となり、秋幸は近親相姦という人としての禁忌を破つたことに繋がるのである。つまり、近親相姦を行うことによって、秋幸は三つの禁忌を破つたのだ。そして、禁忌を破つたことで秋幸は縛られ続けていた母系から解き放たれ、確固たる自己を確立したのである。つまり、近親相姦とは秋幸にとつて自己を確立する行為であった。母系の血縁のしがらみに葛藤を憶え、自らをその中に押し込む限界が訪れた秋幸は「存る者」として認められたい気持ちが強くなった。この時既に、秋幸は秋幸として生きるということを考えていたのではないだろうか。そして秋幸は近親相姦を行ったのだが、秋幸は獲得したいと願った安雄の「わきが」のにおいを手に入れることは

出来なかつた。だが、「あの男」を父と認め、これまで禁忌としてきた性交を行うことによつて秋幸は異母妹に「青いよ
うな、石鹸のようなにおい」がすると言われても、その言葉
を受け入れるのではなく、表のKにあるように「今日から、
おれの体は獣のにおいがする。安雄のように、わきがのにお
いがする。」と自身の意見に確信を持てるようになったので
ある。これまで、他人に従つて生きてきた秋幸は三つもの禁
忌を破つたことにより、確固たる存在となり自己を確立した
のだ。そして、主人公として相応しい人物へと昇り詰めていっ
たのである。

おわりに

『岬』に起こる出来事に影響を受ける者は姉であり、その
姉に寄り添い行動する秋幸は潜在的な主人公として描かれて
いた。秋幸は、姉や母の呪言により母系に縛り付けられるこ
とによつて、母系に対し「息苦しさ」と葛藤を憶える。そこ
で、クライマックスにおいて秋幸は母系から自由になるため
に自身に科した禁忌を破つたのである。秋幸は、これまで他

人の言葉に従つのみであつたが、近親相姦という禁忌を破つ
たことにより、秋幸はにおいという「生」の証を獲得し、さ
らに、自分の意見に確信を持てる人物へと成長した。他人の
言葉に影響を受けることなく、自分の意見に確信を持てる人
物に成長したことは、秋幸が確固たる自己を確立したことを
意味する。つまり、『岬』は秋幸が主人公として相応しい人
物まで昇り詰めていく段階を描いた作品であつたのだ。主人
公として相応しい力を獲得した秋幸ではあつたが、近親相姦
を行つたため、秋幸は「あの男」を敵とし、対峙するという
新たな試練まで手に入れてしまつたのである。そして、この
試練は「あの男」を敵とする『枯木灘』へと連続していくの
である。

『火宅』では兄を描いた中上にとつて、『岬』は秋幸を主人
公としながら、姉を描いた作品でもあつたのだ。中上は『岬』
において主人公となるための力を秋幸に持たせたことにより、
『枯木灘』では秋幸が主体となる作品へと展開させ、秋幸を
作品の前面に描いていく。そして、『鳳仙花』では母を描き、
『地の果て 至上の時』では実父・浜村龍造を描いていくの
である。

註

(1) 芥川賞の選評において『岬』の人物関係の複雑さについて述べている箇所を挙げる。

吉行淳之介「人間関係が複雑をきわめているので、二度読んだ。」

丹羽文雄「人物が多すぎて、判りにくいこと。」

井上靖「人間関係をのみこむのに、多少難渋した。」

永井龍男「登場人物の親戚、婚姻関係が錯雑していて、それを呑み込むまでに骨が折れた。」

瀧井孝作「紀州新宮あたりの土方一家の話らしいが、人物がゴチャゴチャして、描写も何もない、わけのわからんものと私は見た。」

(2) 和辻哲郎「人間の学としての倫理学」(一九五一年)によると、**存**は主体的作用であり、自覚的に有ることを意味し、**在**は物や人物が場所に有ることを意味する。

(3) 渡部直己「真近さについて」(『中上健次論』、河出書房新社、一九九六年)

(4) 近親相姦についての先行論は次のものがある。

渡部直己「真近さについて」(『中上健次論』、河出書房新社、一九九六年)

物語の結末でこの思い(彼のみ不在の時期へ女たちの意識が退行していくことへの反撥・引用者注)が不快のきわみに達するとき、「彼」は唐突にもきわめて逆説的な振る舞いにおよぶ。種違いの「兄」にむけて「女」の領

分から強いられる可変性への最終的な反撥として、腹違いの「妹」久美を抱くという決断がそれであり、「彼」はそこで、かつていくつもの悪事を働き、三人もの女を同時に孕ませ、いまも実の娘である久美を「妾」にするという噂までつきまとうその実父、出来るなら抹殺してしまいたいとさえ唾棄しつづける「あの男」と似たような「酷いこと」をしでかしてしまつたのだ。

四方田犬彦「貴種の終焉」(『貴種と転生・中上健次』、一九九六年、新潮社)

本質を形成するのは血に他ならない。だが、血はあくまで生物学的な自然として顔を出しているのであって、血が人為の意味を担った媒体あるという事態そのものが問い付されるまでには至っていない。「彼」は「あの男」の姿を直接正視することはできない。「あの男」を否定するには、とりあえずその根拠となる生物学的秩序を攪拌するしかない。「彼」と「女」との近親相姦は、そのようにして正当化される。「女」を犯すことは、その起源である「あの男」を犯すことだ。

小林幹也「『岬』 近親相姦と分身」(『縦覧』、一九九八年) 秋幸にとつて腹違いの妹と寝た理由は、実父への報復ばかりではなかった。それも含まれていたが、母、姉、兄への報復も含まれていたのである。それはわずらわしい血縁を自分に背負わせた者たちへの報復だったのである。李鍾旭「中上健次『岬』論」「秋幸」の誕生過程をめぐつ

て」(『千里山文学論集』、二〇〇四年)

「あの男」への復讐(=「儀式」)のために「彼」が取った方法とは、腹違いの「妹」(=久美)との肉体的接触であった。

(5) 次の会話は一度目と二度目の性交の間に交わされたものである。

「くさいことあらへんな、青いよつな、石鹸のようなおいしいするな」女はひとり「こちるよつにつぶやく。

(…中略…)

「死のと思たことがあるか」彼は訊いた。

「しょうもない」女は言った。彼に足をからめた。「こんな若い身空で、そんなこと考えますかいな。そのうち、金をどっさり持った人と結婚してな。兄ちゃん、その時、あいつは新地で体売ってたなんて言うて、邪魔せんといてな」彼はつなずいた。

(6) 川合智「誤読 される秋幸 中上健次『岬』の持つ可能性」(『学芸国語国文学』、二〇〇八年)

関係者系図

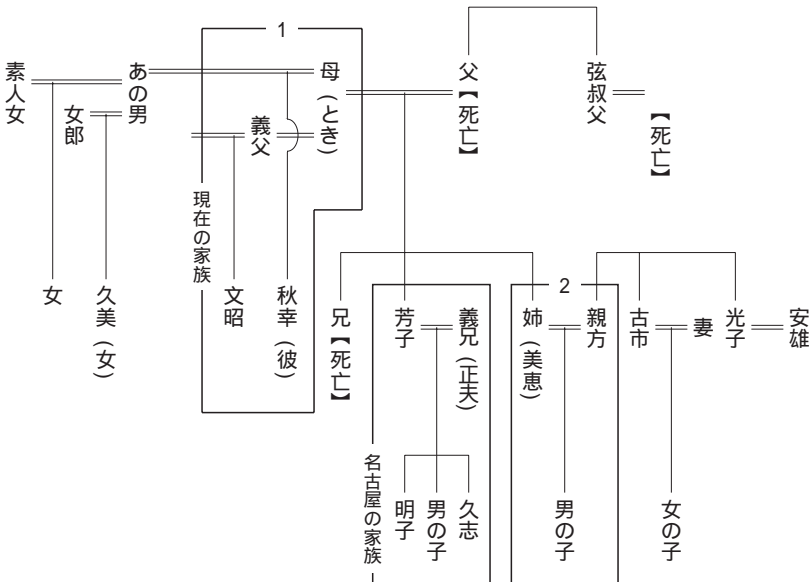


表 『岬』における主な出来事

出来事	足音	におい
<p>姉と母の家へ行く道中、姉は秋幸が兄みたいな気がし、兄のように手をつなぐように言う。</p> <p>土方仕事、土を掘っている時。</p> <p>光子が安雄の弁当を持ってくる。</p> <p>姉がすしを作り、姉の家で食べるか訊いてから、母らと食べるように言い改める。弦叔父が秋幸が「あの男」にそっくりになってきたと言う。</p> <p>安雄が古市を刺す。</p> <p>古市の葬儀の翌朝。</p> <p>寝込んだ姉が、秋幸を見て、兄に似ていると言う。仕事について訊く。</p>	<p>歩きたびに、作業着にした乗馬スボンのこすれあう音がたつた。大きく股をひらいて歩いた。地下足袋は、音をたてなかつた。 A</p> <p>すしを持って、親方の家を出た。夕焼けは終わっていた。わざわざ遠まわりして、新地をとあつた。</p> <p>「弥生」が、それだった。そこを足早にとおりすぎた。その店に入ることも、その店の前を通りすぎることも誰かにみられ、禁じられている気がした。自分の地下足袋の足音を確かめながら、家にむかつた。 B</p> <p>母と連れ立って、歩いて帰った。ひたひた、と地下足袋が鳴った。</p>	<p>安雄のわきがのにおいがした。彼は息をつめた。吐き気がした。 D</p> <p>「傍からみたら、新婚はやほやにみえるやろ。」</p> <p>「しょうもないこと言うて」安雄は言う。また、安雄のわきがのにおいがする。 E</p> <p>一体何が原因なのか、彼にはわからなかつた。突然、起こってしまった。安雄の姿を想い浮かべた。いや、安雄の体が動く時わきの下からもれるわきがのにおいを想い出した。 F</p> <p>死んだものに、この朝がないというのが不思議だった。干物を焼いたにおいがしていた。兄に、あの時、刺されて死んでいたら、自分もこの朝を見ることも、感じることもない。 G</p>

<p>人夫らで酒を飲む。</p> <p>父の法事の直前、姉が仏壇を壊しにかかった。姉を家に連れて行った。</p> <p>姉が子供のようになってしまった。</p>	<p>彼は、立ち上がって、玄関の硝子戸を閉めた。その彼の、畳を踏む足音に、姉は「来たあ来たあ」と言った。</p>	<p>兄が包丁を持ってやって来た時のことを思い出した。刃物で、刺し傷つけることすら出来なかった。湯呑みの酒を彼は飲み干した。胃が熱く痺れ、腸を通して、陰囊のつけ根あたりに伝わる。下着から汗がおった。 H</p> <p>「母さんのおいは卵焼きのにおい」「あほらし」と彼はわらった。</p> <p>「母さんのおいは卵焼きのにおいか」芳子が言う。わらう。「昔から貧乏して、卵焼きが、うちの一番のおかずやったもんねえ。兄ちゃんも美恵も、夜のおかずは卵焼きときくと、わあわあ言うて」</p> <p>「貧乏はいちやいな」母は言った。</p> <p>「貧乏でも、かまつかしてえ」芳子は言う。「なあ、美恵ちゃん、貧乏でもかまんなあ」 I</p> <p>彼のわき毛を、髪でくすぐった。鼻をおしあて、においをおいだ。「くさいことあらへんな、青いよな、石鹸のようなにおいするな」女はひとりこちるよつにつぶやく。 J</p> <p>五体をかけめぐるあの男の血を、眼を閉じ、身をゆすり声をあげる妹に、みせてやりたいと思った。今日から、おれの体は獣のにおいがする。安雄のように、わきがのにおいがする。 K</p>
--	--	--

岬へ行く。
異母妹と性交を行う。